

“木の学校づくりネットワーク” 第 2 号

編集：東洋大学木と建築で創造する共生社会研究センター
木の学校づくりネットワークグループ

[巻頭コラム]



工藤和美 (くどう かずみ)
WASS 研究員
工学部建築学科教授
建築家/シーラカンズ K&H

「木はいいよね！落ち着くし、触れるし、やさしいし。何かストレスが無くなる感じで、子ども達の怪我が減ったのよ。」

これは、一年点検で訪れた時、さつき幼稚園の園長先生から頂いたお言葉。コンクリート造の旧園舎で、25 年間過ごしてこられた経験と照らし合わせてのこの感想は、今まさに私たちが進めて行こうとしている WASS の活動へのエールのようにも聞こえてきます。もちろん、地球環境への配慮、心理学的効果や科学的根拠もさることながら、使い手の満足があってこそ木が生きてくるし、多くの木を用いることができると思っています。

学校建築の設計を手がける時に、他の施設と比べて私をもっとも頭を悩ますのが、掲示物の多さです。日本の学校では、特に幼稚園や小学校においては、「環境整備」という呼び方で部屋を飾る事が多く、掲示可能な壁が必要だと求められています。現在、多くの学校で使用されている工業製品の壁仕上げでは簡単には掲示ができません。ところが、木質仕上げの部屋では、天井でも壁でもちょっとしたピンがあれば簡単に掲示することができます。学校のような大きな建築では、仕上げの量も大変なものです。木に囲まれた空間になることで、掲示の場所を探し、掲示方法を如何しようかと頭をひねるといったス

トレスから解放されます。

しかし、木と付き合うには少しのんびりした心構えも必要です。木は呼吸しているので、湿気を吸ったり乾燥したりと 1 年を通して伸び縮みします。落ち着くまで少々暴れますし、勝手の悪い時期もあります。その時、あせって処理するのではなく、1 年 2 年と様子を見るだけの余裕も必要です。子どもの成長を見守る親の目をもったユーザー教育も大切なのかもしれません。

学校は、子ども達が一日の大半を過ごす空間です。心地よさをもった木の学校づくりを広げることは、未来を担う人を育てる上で、重要な役割を担うこととなります。「木はいいよね！」をますます広げましょう。

WASS シンポジウム報告

平成 20 年 10 月 25 日に WASS の第 1 回シンポジウムが秋田、三重、群馬、山梨など遠路からの方々を含め 300 余名の参加者を迎えて開催されました。

最初の東洋大学学長松尾友矩氏による歓迎の挨拶に続いて、来賓挨拶の中で文部科学省施設助成課長岩本健吾氏は学校の内装木質化への補助強化を進める考えを明らかにし、東京大学名誉教授内田祥哉氏は戦後木造史を簡潔明快に説明されました。

講演に入ると、埼玉県ときがわ町長関口定男氏は同町で進めている小中学校の木質化の現状と効果について話されました。また、建築家の中村勉氏は低炭素社会における木の学校づくりの大切さを、建築家の藤野珠枝氏はご自身の経験から地域産材を用いた学校建設における工夫や課題を説明されました。

みなさんの「木」への思いが溢れ、シンポジウム

の時間が大幅に圧縮されたため、議論を深めるのは今後の宿題となりました。

シンポジウムの詳しい内容は冊子にまとめて後日あらためて報告いたします。ここでは、参加者の意見、感想や問題意識の一部を掲載します。

■大変よかった。知識を得られたばかりでなく、心強さを感じた。林業も農業も同じ問題を抱えている。(ジャーナリスト)

■「学校」にしばって「木造」を研究することは大変面白いと思いました。(コンサルタント業務)

■大御所の先生はもとより、次世代の若い研究者の意見、女性の建築の研究に新しい時代を感じさせられました。また、大学が学際的に産学官を超えて一般市民にも門戸を開いている姿に感動しました。ここに新しい研究の文化が開けることをお祈りします。(建築家)

■小さい頃は環境のために木を伐るな、木を伐るなと言われていたけど、それが逆に問題となっている事実に驚いた。(学生)

■木を使うことは環境と共生していくことだとすごく感じました。使うだけでなく育てる必要があり、循環するシステムの確立が重要であると考えました。(学生)

■普段の自分の行動範囲ではお話をうかがう機会の少ない分野の方々が熱心に活動されているのに非常に刺激を受けました。(研究者)

■大変勉強になりました。長い取材経験から、日本の森林そのものがピンチにある点も無視できないと思いました。(ドキュメンタリー製作者)

■日本の風土や文化を凝縮している木造建築は日本のよさのすべてと言ってよいと思いますが、私たち設計者、そして施主である行政もあまり知識や情報がないため、なかなかスムーズに学校建築の本造化が進まないように見受けられます。WASS が社会に対して大きなメッセージを伝えられたらよいなと思います。(設計者)

■学校建築の計画をするとき、実工事単価と基準単価に開きがありすぎる。交付金の多い少ないが財政力の弱い自治体にとっては大きな課題。(行政)

■地場の木材を利用する場合、製材されていない材を利用する方法論、特に期間について単年度の工事ではなく、プロジェクトとして複数年度に亘る工事として補助がとれる環境づくりが欲しいと思います。(設計事務所)

■地域の材料を使って、安く、早く、安全に学校ができる事例はたくさんあります。まずはそれらの事例を調べてみるのがよいのではないのでしょうか。決して特別なことではなく、一般に流通する材で学校が建築できるように早くなることを期待します。(設計者)

■地産地消、県産材を使った建築物は本当に有意義であると思う。一方で、「県内に多くの県産材を使う」建物の計画が決まると、森林組合内で値段が一時的に高くなったりする現実がある。地産地消を実現するには、材の流通や行政を全体的にまとまりをつけないとなかなか実現できない。(木材販売店)

■国民に木を使うことの意義をもっと理解していただき、自治体や政府に(良い意味で)プレッシャーとなるようにしていく必要がある。(行政)

■建築基準法の見直しを働きかけるようにして欲しい。(設計者・工務店・木材販売店)

■研究・事例発表など外部に発信し、この活動を全国に広めて欲しい。(研究者)

WASS 研究室から

シンポジウムには建築設計者や研究者のみならず、行政担当者や木材関係者など「木」に関わる多くの方々が参加され、「木」を使うといった問題に対する関心の大きさがうかがえます。

「ひとりひとりがそれぞれに問題を抱えているけれども、具体的にどうしたらいいか分からない」という現状の中で、集まった問題を皆で議論し、様々な情報を発信できる場所となることに WASS の大きな意義があると考えています。

～皆様のご意見を歓迎いたします～

WASS 事務局 (担当: 松田)

E-mail: wass@toyonet.toyo.ac.jp

TEL: 049-239-1432 FAX: 049-239-1336